

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22017

研究課題名（和文）植民地期台湾農村における農業技術の社会史 経験・利用・創作に注目して――

研究課題名（英文）A Social History of the Agricultural Technology in Colonial Taiwan: Focusing on the Experience, Utilization, and Creativity

研究代表者

都留 俊太郎 (Tsuru, Shuntaro)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：00871401

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：植民地期台湾農村における農業技術の社会史の全体像について見通しを得た。従来の日本植民地研究が日本帝国の中心から植民地への技術移転の過程を跡づけるにとどまっていたのに対して、移転先における利用者の経験を問い、その創造的営みの重要性を指摘した。特に、在来技術の利用、新技術の創作、農家間での技術のシェアリングなどの論点を指摘することができた。検討にあたっては、文献資料のみならず、在来言語である台湾語を利用したインタビューを積極的に利用し、新たな研究方法論の構築を試みることができた。加えて、以上の研究成果を日本語のみならず、中国語・英語の査読付ジャーナルで発信できたことも重要な成果といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

開発途上国の技術水準は、先進国の政府・企業が推進した技術移転事業によって大幅に上昇したとされている。本研究では、日本帝国統治下の台湾農村と農業技術の移転を対象とし、歴史学のアプローチをもって、そのような技術移転・普及論の再検証を行った。日本の内地のみならず、他の帝国植民地から台湾への技術移転の重要性が明らかになった。また、台湾農家による創造的な実践の重要性が明らかになり、特に在来技術の利用、新技術の創作、技術のシェアリングなどの論点が浮かび上がった。さらに、文献資料の検討のみならず、在来言語である台湾語によるインタビューを積極的に実施し、新たな研究方法論の構築を試みることができた。

研究成果の概要（英文）：We clarified the overall picture of the social history of agricultural technology in rural Taiwan during the colonial period. While scholars have provided simplistic portrayals of technology transfer to the colonies as initiated by Japanese government and business interests, this study focused on the experience of technology users and examined the creativity of Taiwanese farmers. In particular, we pointed out the significance of indigenous technologies, creation of new technologies, and sharing among Taiwanese farming households. In our study, we attempted to construct a new research methodology by conducting an in-depth interview in Taiwanese, a native language, as well as examining Japanese historical documents. In addition, we published the above research results not only in Japanese, but also in Chinese and English peer-reviewed journals.

研究分野：台湾史

キーワード：台湾史 環境史 在来技術 水利 植民地 農業 技術移転

1. 研究開始当初の背景

近現代において帝国が植民地に対して技術・知識をはじめとする新たな文物を持ち込み、現地社会に大きな影響を与えたことはよく知られている。なかには水利システム、鉄道、衛生制度のように植民地統治が終わった後においても、かつての帝国の「遺産」として重要な役割を果たし続けたものも少なくない。これまでの経済史研究の知見によれば、特に日本帝国は、産業開発を重視したことから、様々な技術を植民地に持ち込み、植民地における技術普及・革新に寄与したとされる。

しかしながら、帝国の推進した技術移転が植民地の社会・経済を革新するという見方は、技術の「送り手」である日本の政府・企業の視点に過度に依拠しているように思われる。近年の英語圏の技術史研究の成果を参照するならば、技術の「受け手」として想定される人びとが、植民地の社会・経済的脈絡のもとで新たな技術をどのように経験したか、検討する必要がある。また、私は2011年以来、社会史的研究を行うため台湾農村に計4年以上にわたり住み込み、フィールドワークを実施してきた。そのなかで、農民が政府や企業の推奨する農業技術をただ受容するのではなく、生態環境や折々の経済状況に合わせて、創造的な利用・改造を行ったことを確認してきた。

以上を踏まえて、技術の「受け手」として想定されてきた人びとにかんして、その経験・利用・創作のフェイズにおける主体的契機を問うことで、帝国の技術移転・革新を軸とする単線的な歴史像を克服できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、植民地期の技術移転を台湾農民がどのように経験し、また農業技術をいかに利用・創作したか検討することである。植民地期の技術移転をめぐって、もっぱら受容者・客体として位置づけられてきた台湾農民の主体的諸契機に着目し、政府・企業が技術移転において果たす役割を強調してきた、従来の経済史研究の成果の修正を図る。さらに、植民地社会の人びとの〈生〉のありように即した台湾・日本帝国史像の構築を目的とする。

加えて、従来の台湾政治・文化史研究が民族知識人・エリートの思想や活動を焦点としてきたのに対して、本研究では特に農業従事者・非エリート層に注目することで、社会史的アプローチによる台湾史像の転回を図った。

3. 研究の方法

第一に、文献資料の検討をおこなった。分析の素材としては、政府の行政文書、企業の内部資料、日本統治期に刊行された新聞・雑誌資料などの広範な文献資料を利用した。新型コロナウイルスの感染拡大により当初予定していた一部の資料は入手できなかったが、データベースや事前に入手していた資料を活用することで、検討に必要な資料を確保した。

第二に、台湾の在来言語のひとつである台湾語による高齢者に対するインタビューを実施した。台湾の公用語は中国語であるが、農村部の高齢者には、在来言語をもっぱら利用する人が多い。そこで、在来言語を積極的に利用してインタビューを実施し、具体的かつ精彩に富んだ語りを採集することにした。やはり新型コロナウイルスの感染拡大により、現地調査期間は短縮せざるをえなかったが、オンラインビデオ通話を利用することにより、予定のインタビューを行うことができた。

調査地は、2011年以来、調査を実施してきた旧・台中州北斗郡である。従来の研究において、同地域では数多くの農業技術改良の試みがなされたことが確認されている。台湾農村の平均的特徴を表す地域ではないが、上記のテーマをマイクロレベルで集中的に検討するうえで、さしあたり適切な対象といえる。これまでの調査で構築してきた人的コネクションを利用できる点も、同地域を検討対象として選定するメリットのひとつである。

4. 研究成果

主な研究成果として、以下の三本の論文を刊行した。各著作の内容は下記のとおりである。

(1) 都留俊太郎「台湾農業における『技術の時代』：生産管理の導入と模造・改造農機具の普及を事例に」『東アジア近代史』26号、2023年。

第一次世界大戦後の台湾経済は、農業植民地化の進展とともに大きな変容を遂げ、「技術の時代」が到来していたといえる。それまでは台湾総督府によって製糖業が育成されていたが、一九二〇年代に入ると新品种・蓬莱米の登場にともない、内地市場向けの米生産が拡大していった。また、この時期には台湾農家による購買肥料の利用、嘉南大圳に代表される灌漑設備の建設も進んだ。一連の技術改良を通じて土地生産性は急速に上昇していた。

本論文は、この「技術の時代」の意義を社会史の視角から明らかにするものである。特に農業技術の普及とともに進展した、a) 生産管理の導入、b) 模造・改造農機具の流通、という二つの事例を取り上げた。

① 第一次世界大戦後の台湾糖業において、各製糖会社はシュレッダー、鉄道、屈折計といっ

た機器を新たに配置し、一連の作業スケジュールを巧みに調整することで、生産管理の秩序を構築していった。トラクターやコンバインのような大型機械の導入こそ限定的であったが、台湾農業における生産の合理化は、その源流であるアメリカに遅れることなく実践されたのであった。新たな技術・知識によって裏付けられた生産管理が浸透するなかで、甘蔗農家は製糖会社にしたがうことを余儀なくされた点を指摘した。

② 台湾人農家によって用いられた農機具の生産・流通に着目すると、「技術の時代」の異なる一面が浮かび上がる。1920年代には台湾の農機具市場に内地メーカーが参入し、深耕犁、足踏式脱穀機をはじめとする改良農機具を供給した。しかし、まもなくそれらの模造・改造品の生産・流通が台湾島内では盛んになった。その担い手は、まず内地メーカー製品の販売を仲介した在内地人商人であった。さらに、台湾人の職工により生産された模造・改造農機具が市場を席捲するようになり、そうした状況は戦時期にいたるまで継続した。農家は模造・改造品を積極的に利用して、栽培技術の改良に取り組んだのであった。「技術の時代」の深度と広大な裾野は、職工・農機具商・農家を含む、多様なアクターによる創発的なダイナミズムに着目する必要があることが明らかになった。

なお本成果は、先に東アジア近代史学会の第27回研究大会（2022年7月）にて発表し、当日得られたコメント・アドバイスをもとにして、加筆修正のうえ投稿したものである。

(2) 都留俊太郎「李応章的摩托車：二林街的經濟發展和蔗農組合」許雪姬編『世界・啓蒙・在地：台湾文化協会百年紀念』中央研究院台湾史研究所、2023年2月（査読有）。

本研究の調査対象地である台中州北斗郡の産業・流通の変容を検討し、農家による農業技術の導入・利用の経済的背景を明らかにした。

北斗郡の経済構造と社会関係は日本統治期に大きく変容した。当初は、番挖・王功など港を擁する地域が繁栄しており、人口規模も大きかった。しかし、林本源製糖株式会社が軽便鉄道を建設したのち、北斗郡は縦貫鉄道の後背地となった。そのなかで、二林街には軽便鉄道の西端の終点駅が設置され、集散地として急速に発展し、市街地化（都市化）が進展した。1920年前後に総督府が濁水溪護岸工事を実施し、甘蔗栽培ブームが勃興したことは、農家経営の商品化を促進し、現金収入と購買力を増加させたが、これにともない二林街の発展も加速した。街の周辺部で商業的農業が拡大するとともに、二林街では各種小売業や食品加工業、金融業が発展していったのである。

第一次世界大戦期以後の商業的農業の拡大は、農家の技術改良に対する態度を積極化させた。また、1930年代に入ると市街地の発展を背景として農機具商が登場し、店舗を常設したが、そのことは農家による新技術の導入・改良を円滑化したと考えられる。

なお、本成果は、先に台湾で開催された「世界・啓蒙・在地：台湾文化協会100周年紀念」シンポジウム（2021年10月）にてオンライン発表し、当日得られたコメント・アドバイスをもとに加筆修正のうえ、投稿したものである。

(3) Shuntaro Tsuru, “Irrigation pumps in late colonial Taiwan: Farmers’ utilization of technology and the transition to rice cultivation,” *Modern Asian Studies*（査読有、近刊）

本論文では、台湾農民が1930年代のいわゆる「米糖相剋」状況下にあつて、電動機ポンプおよび風車ポンプを導入することでいかに経営状況の改善を図ったか、検討した。この事例研究を通じて、以下の三つの点を明らかにした。

第一に、台湾農民が植民地の秩序の内側で、農業技術の導入・利用を通じて生存を模索する様態である。技術導入を通じて農家の商品関係への依存の度合いは高まったが、そのことがただちに資本の農家に対する影響の拡大を意味したわけではなかった。農家はただ受動的に新技術を導入したわけではなく、それぞれが置かれた経済条件を考慮しながら、ユニークなかたちで技術を調整・活用・創作したのである。台湾農民による灌漑技術の利用の動態を検討することで、拡大する市場経済の只中における、彼らのエイジェンシーを具体的に描き出した。

第二に、農業技術の普及をめぐる社会的ダイナミクスである。社会的過程に注目することで、農家による生活・経営状況の改善の模索を最大限に把握することが可能になる。もとより、新たな農業技術の移転が植民地台湾に与えた影響の大きさは否定できないが、それら技術の重要性はイノベーションと普及の過程にのみ注目しては捉えきれない。灌漑条件に恵まれていなかったことで、北斗郡の多くの台湾人農民は当初は、地域甘蔗市場を買い手独占していた製糖会社の要請に従わざるをえなかった。しかし、蓬莱米と改良農機具が1920年代に流通しはじめることで、農家は米糖相剋関係をも巧みに利用しながら、生活・経営状況の改善を図ることが可能になった。かかる経済・政治的文脈のもとで、農家は各種の灌漑用ポンプを導入・利用し、水稲作に移行することで、利益を拡大しようとしたのであった。

第三に、農業生産が商業化する只中における、農家間のつながりである。販売とシェアリングを通じた揚水能力の分配は、台湾農民がある種のつながりを創り出していたことを示唆する。ポンプの所有者は持つ者と持たざる者の格差を縮小しようとしたわけではないので、もとよりこのようなつながりの社会的役割を過大に評価するべきではない。しかし、商品生産のための農業技術の普及は、社会的つながりをただ切断していったわけではないことは強調されるべきである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 都留 俊太郎	4. 巻 855
2. 論文標題 現代台湾の地方志編纂とジェンダー（特集 女性史・ジェンダー史から問う自治体史）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 都留 俊太郎	4. 巻 26
2. 論文標題 台湾農業における『技術の時代』：生産管理の導入と模造・改造農機具の普及を事例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東アジア近代史	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 都留 俊太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 李応章的摩托車：二林街的經濟發展和蔗農組合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 許雪姬編『世界・啓蒙・在地：台湾文化協会百年記念』	6. 最初と最後の頁 241-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuru Shuntaro	4. 巻 57
2. 論文標題 Irrigation pumps in late colonial Taiwan: Farmers' utilization of technology and the transition to rice cultivation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Modern Asian Studies	6. 最初と最後の頁 1~37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0026749X2300001X	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 都留俊太郎
2. 発表標題 李応章の摩托車：二林街的經濟發展和蔗農事件
3. 学会等名 「世界・啓蒙・在地：台湾文化協會一百週年紀念」シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 都留俊太郎
2. 発表標題 『台湾之農具』と帝国の視角
3. 学会等名 日本植民地研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 都留俊太郎
2. 発表標題 台湾農村における技術の時代 移転・利用・流用
3. 学会等名 東アジア近代史学会第27回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------